

# オルタナティブデータから探る健康リスク

経済学部 教授 井深陽子いぶかようこ

近年、経済学の調査・研究でオルタナティブデータの活用が進んでいます。オルタナティブデータとは、デジタル化の進展に伴って集積されたデータのことで、携帯電話の位置情報、小売店での購買情報など、高頻度で記録され情報の粒度が高いデータのことを指します。オルタナティブデータは、経済活動を含む人の行動の詳細な記録であり、経済学のテーマである人の意思決定がどのように行われているかをあぶり出す手がかりとなります。

オルタナティブデータは、人の健康に関しても重要な情報を与えます。例えば、医療機関を受診したときに発行される診療報酬明細はレセプトデータと呼ばれる、健康や受診に関する重要な情報を含んでいます。機微な情報を含むため、研究は個人が特定化できないように加工されたデータを用いて細心の注意を持って行われます。レセプトデータは悉皆性しつぱいせいが高いため、通常の調査の対象にはなりにくい人々を対象とすることができるといったメリットを持ち、従来のデータではなし得なかつ

た新しい発見につながる可能性があります。近年の医療保険政策は多くの制度改革が行われていますが、このような政策に示唆を与える医療費の窓口負担と受診行動の関係もレセプトデータを用いて明らかになっています。

筆者らは経済活動と健康リスクの間の関係を探るべく、官公庁や産業界からの協力を得てオルタナティブデータを用いた研究を進めています。株式会社みずほ銀行から提供を受けた統計入出金情報や総務省消防庁から提供を受けた救急搬送の記録データに基づいた分析は、健康リスクが経済活動の活発化とともに上昇することを示しています。データに記録されている救急搬送の入電時間の情報により、そのような健康リスクが一日のうちどのくらい上昇するかも分かれます。

このように、人の健康は経済活動という一見思ってもよらない事象と関係しています。今後も多面的な健康の一端を明らかにすべく、健康を経済・社会との接点という角度から見つめ、研究を進めてまいります。